

みんなでみんなの学校だより

Newsletter of School For All Projects in West Africa

March 2013

vol.6

目次

Editorial

「みんなの学校と全国普及」

各国からのたより

セネガルだより

「残り1年半で学校運営委員会を全国普及できる「かも」?!」

ブルキナファソだより

「COGES モデルの精緻化を目指して」

ニジェールだより

編集後記

「Stories」 原 雅裕



みんなでみんなの学校だよりは、JICA が西アフリカで展開している「みんなの学校」群の4つのプロジェクトの動向、プロジェクトを取り巻く状況についての情報をリアルタイムにお知らせすることを目的として半年ごとに発行されています。今号の内容を少しご紹介しましょう。



セネガルからは、これまで5年半にわたり試行してきた学校運営委員会(CGE)モデルが、全国普及に向けた教育省公式モデルとして承認されたことを受け、いよいよ全国普及に向けて手法や手順の精査と工夫、CGE 連合の強化、資金確保への調整と奮闘の様子が伝えられています。

ブルキナファソは、全国普及展開を見据えて、持続可能な学校運営委員会(COGES)モデルの確立を目指して調整が進められているところです。住民のニーズをなんとか反映させながらCOGES の活動を整理していくことにより、COGES モデルの普遍化を実現させようとする過程における努力の様子が報告されています。

既にCOGES の全国普及に成功しているニジェールからは、今後いくつかの開発パートナーから投入が見込まれる学校補助金を想定しつつ、そうした外部リソースを効果的に活用し、児童の学力向上に結び付けることのできるCOGES となり得るようCOGES の能力強化支援の様子が伝えられています。

今回は、残念ながらマリからの報告は実現できませんでした。前回の報告でお伝えしたように、戦禍に追われる形でプロジェクトが休止に追い込まれてしまったからです。またいつの日か、マリからも報告できる日が来ることを「みんなで」祈り続けましょう。



「みんなの学校モデル」の全国普及に向けて奮闘中の国々、その「モデル」に、さらに児童の学力向上につながる要素を融合させてCOGES の有効性強化の支援に励む国々。それぞれの過程における試行錯誤の模様を、その困難さと、それでも挑みがいのある試みについて解説した“editorial”とともに“Stories”仕立てになった今号を、最後までじっくりとお楽しみ下さい。

みんなの学校と全国普及

原 雅裕

セネガルの PAES2 とブルキナファソの PACOGES は、それぞれのプロジェクトの形作ってきたモデルの全国普及を射程に捉え、その実現に向けて全力で進みつつある。ニジェールやほかの国のプロジェクト全国普及のプロセスや手続を参考に両プロジェクトの普及への見通しについて考えてみたい。

ニジェールの急速な拡大の理由

ニジェールのみんなの学校では、開始直後から非常に早いペースで、対象校、地域の拡大を行ってきた。初年度に、21 校から 450 校、2 年目に 1200 校、3 年目に 2800 校と対象校を拡大した。その早さはモデル形成型のプロジェクトのその当時常識を超えており、評価や運営調査のたびに調査団とプロジェクトの間でその是非につき議論があった。そして評価結果に基づいた調査団の判断により、計画を作り替え、拡大を加速していった。早いペースの対象校の拡大は、大きく分けて二つの理由があった。

ひとつは、大規模で実証を行うことによるモデル効果の視覚化である。個々の COGES の改善活動は見えにくい、範囲が広がれば、モデルの成果が他の地域との比較で見えやすくなる。実際に 2 年目には、タウア州をカバーすることにより他州との入学率等の向上度合の比較などにより、モデルの有効性を広くアピールすることができた。

二つ目の、そしてもっとも重要な理由は、実証しているモデルを全国普及可能なモデルにスリム化することであった。モデル普及型のプロジェクトが全国普及に成功しない理由は、モデルの効果がでない場合よりも、モデルが全国普及に耐えうるものになっていない場合が多い。そのため、みんなの学校では、全国普及のシミュレーションとして大規模な実証を行い、効果を維持しながら、モデルをスリム化するという作業を行ったのである。

プロジェクトを実施（あるいは支援）している者は、実証段階では成果を出すために、様々な角度からモデルの有効性を検証したいと思うため、モデルが投入過多になってしまう傾向がある。投入過多だと認識していても、結果を求められているプロジェクト実施者の心理としては、モデルをその国の肩幅に合ったものに落としていく、あるいは、削っていくという作業がしにくい。研修参加者を 1 校当たり 2 名から 3 名に、研修日程を 1 日から 2 日に増やすことは、100 校に対する研修であればたいして難しいことではないが、それが、1 万校になれば、研修費用が大幅に拡大し、研修期間も延びる。結果的には、そのモデルは全国普及から遠ざかっていく。これは、研修対象者や期間を増やす場合だが、逆にそれ

らを減らすことは、効果を維持しながら、投入を少なくしていく作業であり、非常に難しい。そしてこの作業をいきなり、全国普及の前に行うことは、ほとんど不可能に近い。つまり、実証の段階ですでに全国普及を想定した、その国の事情にあった投入で、従来の効果を維持するモデルを作ることが必要なのである。

全国普及までのその他の条件

モデルのスリム化をクリアしたら、次は、モデルの承認化（非公式、公式）というステップがある。ニジェールの場合、COGES 全国普及戦略ワークショップという手続を行った。このステップで重要なのが、この国の公式なモデルとしての手続きと同時に、教育省幹部や主要ドナーの担当者など、政策、あるいは予算の決定に影響を及ぼす関係者へのモデルの有効性についての啓発、宣伝活動である。ケニアの SMASSE の全国普及は、承認化のステップなしで、大臣の「全国普及する」という鶴の一声で決定され、実施された。勿論、そこに至るまでの関係者への周知な働きかけが戦略的になされていた。実質的な政策決定が大臣にあると特定し、働きかけたプロジェクトの戦略が優れていた。

全国普及の最終段階と全国普及への見通し

モデルの全国普及の最終段階は、予算化、予算獲得であるが、このステップは、何をすれば成功するのか、確定しにくい。普及しやすいモデルを形成できても、それが国家モデルと承認されても、モデルの全国普及として国が作った教育開発計画の活動として記載されても、それが、予算獲得に直結するわけではない。大臣の意向で、すべてが決定されてしまう国もあれば、世銀のように、現場にある程度予算執行権限移譲がなされており、現場担当者との交渉のみである程度の予算が獲得できる場合もある。しかし、いつどこで誰とどのような交渉をすれば、確実に予算が獲得できる、という保証できる方法はない。

したがって、全国普及の最後のステップを通過するための方策は、それぞれのプロジェクトがそれぞれ、可能性を探り、手順を特定していくしかないが、全国普及の形も、あるいはモデルの形も固定したものとは考えず、最終的な普及を目的とした柔軟な思考が重要である。さらに、予算獲得をはじめとした政府、ドナーへの働きかけは、プロジェクト単独では不十分であり、JICA 事務所や本部も含めた全 JICA としての対応が不可欠である。

プロジェクト後半戦、怒涛の CGE 全国普及期の幕開け

プロジェクト第3年次の前半は、前号(2012年10月発行)で予告したとおり、怒涛と呼ぶのにふさわしい半年となりました。

まず11月に、プロジェクトが第1フェーズを含め5年半にわたり試行してきた学校運営委員会(CGЕ)モデルが、全国普及に向けた教育省公式モデルとして承認されました。中央と全14州の教育行政官(視学官)をはじめ、開発援助機関、市民社会組織、教員組合の代表の計84名がモデル案の精読と推敲に取り組んだ末、モデルがほぼ提案どおりに採用されました。これで、第2フェーズのプロジェクト目標の二本柱のうち「CGЕモデルの確立」が達成されました。セネガルでCGЕをどうやって設立し、住民主導による活動計画づくりと実施をどう進めていくのが効果的なのか。その結論が「JICAモデルで」と下され、いよいよ後半戦の「モデルの全国普及」に突入しました。

そこで早速、全国普及準備として研修ガイドを再改訂し、研修戦略も抜本的に見直しました。前半2年間の経験を踏まえ、例えばCGЕ役員選出や活動計画(PAV)策定の手順を、住民総会における選挙や承認の過程を残した上で簡略化したり、活動計画や会計実務の様式をさらに減らしたり簡素化したりしました。一方で演習を充実させたり、視学官が短期間で講師力を高められるよう、講師研修前に研修ガイドを配って予習・参照できるようにしたり、校長のみに頼らないCGЕ設立に向け、研修受講者に住民代表を加えたりと、様々な工夫を凝らしました。

それらをもとに、12月から2月にかけて、全国普及期最初の対象州に選ばれたカオラックで、CGЕ設立・機能強化に向けた研修を県毎に実施しました。研修受講者は、講師としての視学官42名、そして全3県717校中702校(97.9%)の住民代表と小学校長、計2,053名に上りました。現在、CGЕ設立とその後の活動計画策定の状況確認が、視学官によって進められているところです。



続いて2月には、「みんなの学校」発祥地のニジェールで成果を上げてきた、州教育フォーラムを開催しました。ファティック州では「卒業試験の成績向上」、カフリン州では「入学率や就学率の改善」をテーマに、CGЕ連合、自治体、教育行政に加え、宗教指導者、教員組合、開発援助機関・団体など、それぞれ150名前後が一堂に会し、各州の課題解決に向けて熱い議論を戦わせました。その結果、CGЕ連合は「自治体単位の模擬試験」の実施やCGЕによる「補習授業」「入学児童登録」の推進、教育行政は「教員の監督指導のための学校訪問の強化」や「入学登録児童数に応じた優先的な教員配置」、そして自治体はこれらの活動の実施に必要な資金や移動手段などの提供といった、関係者による行動計画が採択されて閉会しました。

今後、5月からの入学児童登録、及び6月の卒業試験に向け、各州の取り組みを追跡し、期待される成果を確実に上げるために必要な助言指導を提供してまいります。

明るくなってきた、CGЕ全国普及資金確保の見通し

これまでの活動成果を踏まえた、教育省内の関係部署や他の開発援助機関への営業活動がようやく奏功しはじめ、CGЕ全国普及資金確保の見通しが明るくなってきました。現時点までに、セネガル政府が2013年度研修予算として約4,500万円相当の充当を承認し、また、最大手の開発援助機関である世界銀行が、必要総額に近い約2億円相当の予算措置に向けて組織内の調整を進めていることがわかりました。

怒涛の6か月を乗り越えるのは、体力的にも精神的にも決して容易ではありませんでした。その中で、最も高齢で最も疲れているはずのチーム長が、こう言ったのです。

「PAES2との2年半を通じて得たものは、成果を出すために努力を惜しまないチームのあり方だ。」

依然として、最終的に確保できる資金規模とその時期には不確定要素がつきまとうことは確かです。しかし、このチームなら、2014年8月のプロジェクト終了までに、残る11州へのCGЕ普及が完了できる可能性はまだ十分にあると、心から思っています。

セネガル PAES2 専門家チーム一同

セネガル史上初「みんなの学校式」教育フォーラム開催

去る7月のプロジェクト中間レビュー調査の結論(前号参照)を踏まえ、プロジェクトが地方自治体単位で試行中のCGЕ連合を活性化させるべく、新たな取り組みを進めました。まずは11月に、重点2州のそれぞれで、CGЕ連合、自治体、教育行政の代表が集う経験共有セミナーを開催しました。設立後の活動開始や設立自体に困難を抱えるCGЕ連合が、州内の優良事例に刺激を受けたり、自治体の協力表明に励まされたりした結果、その後、2州のCGЕ連合の設立数は50から70へ、策定された活動計画書の数は27から65へと、状況が飛躍的に改善されました。



～ブルキナだより～

COGES モデルの精緻化を目指して

Projet d'Appui aux Comités de Gestion d'Écoles
(PACOGES) 専門家

松谷 曜子
杉本 記久恵
太田 恵美

◆生徒の学習成果向上の可視化に向けて◆

みんなの学校プロジェクトは、民主選挙による学校運営委員会(以下、COGES)役員を選出、住民と学校が一体となって策定する学校活動計画の実施、持続可能なモニタリング体制の構築の3点セットをパッケージ化し、ニジェールからセネガル、マリ、ブルキナへと普及対象を拡大してきました。従来のCOGESがアフリカ大陸のあちらこちらで形骸化し、機能しなくなった状況と比較すると、住民たちの共通な改善ニーズに沿った住民参加型の「みんなの学校アプローチ」は西アフリカの教育現場に大きな功績を遺したと言えます。

さて、PACOGESですが、2009年から開始されたプロジェクトが3年半あまり経過しました。1,500あまり設置されたCOGESの活動が2～4年を経過するようになり、COGES活動を通しての就学率の向上、学校環境の改善など、様々な成果を上げるようになってきました。一方で、多くのCOGESが直面する共通の課題にも直面するようになってきました。それは、「コミュニティの動員が難しい」という悩みです。みんなの学校モデルが「住民参加」を全面に謳いながら、一方で住民参加が難しいという現状があるのです。PACOGESでは、この課題と向き合うことにより、設立されたCOGESが5年後も、更に10年後にも自然消滅してしまうことなく、継続的に機能し続けてほしいと考えてきました。

こうした課題解決への道しるべとして私たちが目指したのは、「いかにCOGESの取り組みを学習達成度の改善に集中させていくか」というものでした。また、これらの取り組みに対して、COGESが独立してこの目標達成を目指すのではなく、まずはその母体となるコミュニティが、いかにこの「学習達成度の改善を共通目標として明確化」し、いかに「その成果を可視化するか」ということでした。

このような視点に至った背景には、コミュニティ意識調査を通して明らかとなった「コミュニティの学校に対する要望」があります。子どもたちを学校に送り出す父母たちは、「子どもたちが学校を卒業し」、更には「高等教育を受け」、「社会人として成功してほしい」というような、どこの社会にでもある当たり前の願いを持っています。コミュニティを代表するCOGESは本来、これらの願いを達成すべき取り組みを実施し、成果をだし、それらを目に見える形でコミュニティに還元する必要があります。それによってようやくコミュニティは参加した意義を見出すことができるのです。

これまで活動を開始したCOGESでは、地域住民の計り知れない努力によって多種多様な活動を行ってきました。いずれの活動も、元々は「学校が抱えている問題」に基づいて行われていますから、当然、学校のニーズには答えているはずですが、事実、これらの活動によって様々な教育現場の改善が行われてきました。例えば、学校校舎(藁ぶき校舎を含む)の建設は「教育へのアクセス」を改善し、教員住宅の整備や学校給食のような「学習環境・条件」の改善

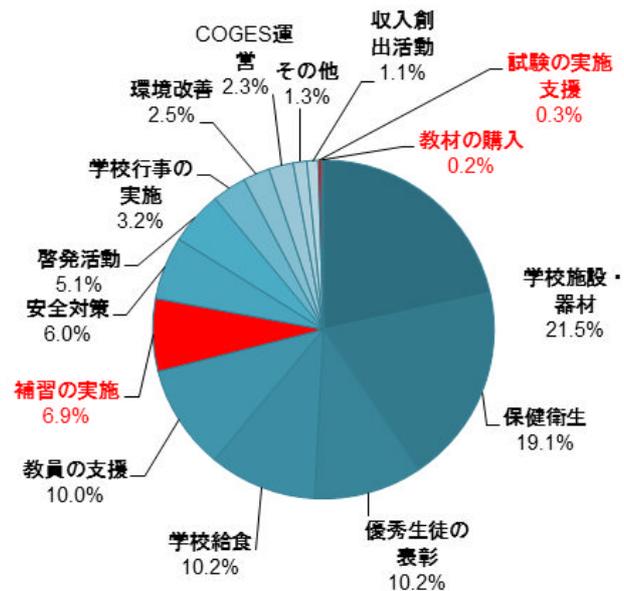


図 COGES 活動の分類
(1070 COGES による 2220 活動を分類 : 2009～2011 年度)

は、教員の意欲を向上し、生徒が学習に集中できる環境を生み出しました。ただし、これらの改善は、学習達成度の向上に直接的に効果をもたらす活動と言うよりはむしろ、目標に近づくための手段あるいはプロセスとして整理すべきものです。したがって、私たちは、コミュニティと共に「教育の質改善」という大きな枠組みの中で、その活動が「学習達成度」に直接的に効果をもたらすのか、それとも学習達成度に効果を上げるための間接的な効果であるのか、について各活動の着地点を整理し、「COGES 活動を通して何を達成したいのか」を明確にしながらいくことが重要だと考えました。

このような視点を出発点に、現在、PACOGES では、一部の対象校において COGES 活動を「より学習達成度の向上に焦点をあてたもの」に方向づけていくためのパイロット活動に取り組んでいます。主な活動内容は、①学校活動計画作成方法の改善、②コミュニティアプローチ(住民総会)の再検討、③COGESを通して実施できる3つの取組み「学習時間、学習内容の質改善、各アクターの意識化」に関する活動の実施です。

①と②の取組みは、プロジェクト開始以来の大きな変更になります。新しい計画作成方法は、従来の活動計画に比べてよりコミュニティが参加しやすく、参加した皆の音が聴けるようなもの、更には計画を練っていく過程で、コミュニティが“学習達成度の向上”をより意識し具体化できるような仕組みになっています。

ブルキナファソでは、どんなに意欲的な教員でも、教室にひしめき合う 80 人の生徒を相手にはなかなか本領を發揮できません。生徒もまた、ノートを開くこともできないくらいぎゅうぎゅうに詰め込まれた教室の中で、集中して学習することは困難です。このような環境の中で、生徒一人一人がいかに自己学習の質と量を充足させていくかが鍵となっています。③の活動に含まれる学習時間ならびに内容の改善については、従来行われてきたような補習のみならず、授業についていけない子どもへのアプローチ、全体の底上げを図れるような新しいタイプの補習活動を模索してみる予定です。

プロジェクトでは、このようにモデルの精緻化のための最終的な試行を開始しています。プロジェクト第 1 フェーズの終了まで残り 8 ヶ月を切ってしまいましたが、この COGES モデルを精緻化することで、全国普及展開に耐え

うる持続可能な COGES モデルと COGES 活動を整理したいと考えています。

◆全国普及展開を目前に◆

ブルキナでは、前述したように構築された「COGES 設立モデル」をさらに第 1 フェーズ終了までに精緻化(「学習達成度の向上」を目指した学校活動計画の策定・実施と同活動のモデル化)した上で、全国普及展開を実施していく予定です。教育省では、COGES 全国普及展開を 2013~2015 年にかけて実施することを基礎教育開発戦略 10 年計画(PDSEB)の中でも表明しており、実際に 2013 年 10 月には全国普及展開を開始することを検討しています。

現在、全国展開を目前としながら課題となっているのは、**COGES 推進を進めていく専門部署が不在であること、全国普及が国家計画として見込まれているものの、その資金源が明確化されていないこと**です。専門部署については、教育省の省改編と並行して設立されることが確約されていますが、未だ省改編自体が実行に移されていないため、全国普及準備を目的とする「全国普及に係る準備技術委員会」を設置しました(2013 年 1 月)。現在、設置された準備技術委員会が中心となり、「全国普及戦略書」の策定を急ピッチで進めています。また戦略書の承認が終了次第、戦略書をプログラム活動計画に落とし込み、実際の予算確保に向けた省内での動きを強めていく予定です。2013 年は PDSEB の開始年度にあたるため、PDSEB 3 年活動計画における予算獲得作業が激化していく可能性が高く、このプロセスに後れを取らないためにも予定通りに戦略書を策定し、省内での大枠での合意を得たいと考えています。一方で、PDSEB の枠内での予算獲得には不安が残るため、世銀や見返り資金等の利用も視野に入れながら、予算獲得に向けた動きを強めていきたいと考えています。



このように全国普及に向けた兆しがようやく見られるようになったブルキナですが、モデルの最終的な精緻化を行いながら、全国普及に向けた準備を着々と行い、息の長い COGES 活動を推進していきたいと考えています。

ブルキナファソ国学校運営委員会支援プロジェクト (PACOGES)

<http://www.jica.go.jp/project/burkinafaso/0901058/index.html>

～ニジェールだより～

「ギヤアア——！ドロボオオおおお！！！」

「どうした！！泥棒！？！？？」

「“あの金”は無事か？」

「なに！“あの金”が盗まれかけた！！？なんてこった！」

「だから、“あの金”をここで保管するなんて危険すぎるって言ったんだ！」

—昨夜未明、サイ県バンゴベリ村にて盗難未遂事件が発生。被害にあったのは、バンゴベリ COGES 会計役ムンケイラ・ジーボ宅。犯人は家人が就寝中にジーボ宅に侵入し、当時ジーボ氏が保管していた現金 50 万セーファーを狙ったと思われる。犯人の侵入に気づいた家人が騒いだため、犯人は現金を手放して逃走。ジーボ氏がかすり傷を負ったほか、被害はない模様—。



これは、盗難未遂事件の実況中継ではありません。みんなの学校が研修にて導入し、その後、実際に村の住民総会で行われたリソース管理のための寸劇型シミュレーションの一幕です。学校に供与された補助金をどう保管すればいいのか—、“銀行はよさそうだが、面倒だ。それでは、会計係に預けてしまおう”。実際にはそんな結論になりがちです。しかし、住民総会でこの寸劇を自分たちで演じてもらえば、リスクを感じてもらえるかもしれない—、そう考えたのです。実際に演じてもらうと、みんなが楽しみながら内容を理解し、納得する結論に辿りつきました。この寸劇は、住民に補助金をどう保管すべきか（個人が保管するのがよいか、銀行に預けるべきか）を考えてもらうためのものですが、この他に、研修では“銀行に預ける場合にはどのような手続きを踏むのか”、“物品はどのように購入するのか”、“その際に忘れてはならないことは何か（領収書！）”、など他にも寸劇がたくさん盛り込まれています。つまり、補助金を受領してから COGES¹、コミュニティが実際に直面する場面や行動のすべてを、寸劇調に演じることで、コミュニティが一連の流れを知り、適切な管理方法を見つけ、自分たちの役割や理解するように組み立

¹ 2012 年 2 月 22 日発出の省令によって、COGES (Comité de Gestion des Etablissements Scolaires: 学校運営委員会) は CGDES (Comité de Gestion Décentralisée des Etablissements Scolaire: 学校分権化運営委員会) と改名されたが、COGES という名称の知名度に鑑み、ここでは便宜上、旧来通りの COGES という名称を使用。



村での寸劇の様子。村長自らアクターとして参加。

てられています。みんなの学校プロジェクトの研修におけるシミュレーションの活用は、非識字者のために考えられた研修手法ですが、普段我々が受けている講義型あるいは参加型といわれる研修よりわかりやすく、もっと応用できる手法ではないかと感じています。

さて、この研修は“外部リソースの適切な管理”にかかる能力強化のためです。そして、もうひとつの能力強化が、“質の改善へむけたリソースの適切な活用”であり、2 つの能力強化を合わせた「補助金モデル」作りに、プロジェクトは現在取り組んでいます。

この補助金モデルパイロット活動の仮説は、“ただ補助金を配るだけではなく、適切な能力強化、つまり補助金の適切な管理とその結果をだすための適切な使い方を、住民・COGES が身に付ければ、補助金はより効率的・効果的に、学習の質の改善に結びつくだろう”、というものです。この仮説をもとに、120 校に対してすでに説明した補助金管理のための研修をまず実施し、その 120 校中 60 校には、“質の改善に繋がるリソースの適切な活用”の能力強化を行ってから、補助金を供与し、それぞれの成果、特に児童の学力改善の違いを測定します。もし、この仮説が正しければ、「補助金を学校にインプットすると、アウトプットとして学習の質が改善される」という構図における“インプット”と“アウトプット”間にあるブラックボックスの中が少し解明されるはずです。

12 月に実施したこれら二つの能力強化研修を経て、補助金が配布され、現在までに対象 120 校すべてで補助金が使用されました。各地では今、それをもとに様々な活動が実施さ



補助金対象地域サイ県の子どもたち。黄色い色鮮やかな民族服が特徴のプール族が多く住んでいます。

れています。補助金の使用用途としては、コミュニティからの動員だけでは手の届きにくかった教科書・教員ガイドの購入が主流であり、その他、教室備品（黒板等）、文房具、夜間学習用の資材（ランプ、燃料等）等に使用されています。特に、「リソースの適切な活用」にかかる研修を受講したほぼすべてのCOGESでは、今まで卒業試験を控えた6年生に偏りがちであった補習授業や夜間グループ学習の対象を1～6年生の全学年にまで広げ、補助金をその活動に必要な資材・備品、教材・テキスト、問題集等の購入に充てています。

今年度は研修および補助金配布の遅れから、全体的な実施期間が短くなり、「外部資金を適切・有効に活用して確実に質の改善へと繋げる」という点では、まだ具体的な成果は見えてこないかもしれません。しかしながら、現場では児童の学力向上へ向けたCOGES・コミュニティ・教員の様々な試みも開始されています。今後、来年度の試行へ向けてさらに能力強化モデルの改善を図ることで、確実な成果へと繋がることが期待されます。



以上が、ここ6か月の補助金パイロット活動の動きでしたが、その他にも、住民参加による質の改善活動支援の一環として、「質のミニマムパッケージ開発」におけるツールの試行に取り組んでいます。9月から首都ニアメの隣県に定期的実施してきた算数ドリルの試行ですが、ニジェール周辺国の治安悪化により、ニアメ以外での実施が難しくなりました。そこで、始めたのが、『みんなの学校算数ドリル教室—寺子屋EPT—』です。現在までに、数の概念から足し算、引き算、掛け算、割り算と、「パート19(ドリル冊子5冊)」まで作成したドリルを用い、そのさらなる改善へ向け、近所の子どもたちをプロジェクト事務所に集めての算数ドリル実証を行っていま

す。また、今後ニアメ市内の学校での試行も開始する予定です。

COGES モニタリング体制強化支援に関しては、教育省COGES調整部の能力強化を図りつつ、経験共有セミナーやCOGES 連合総会モニタリングを実施。また、プロジェクトの働きかけが功を奏し、この3月には2011年度半ばより停止していたCOGESモニタリングのための見返り資金が再開の見込みとなりました。

さらに、「機能する中学校COGES」モデル開発へ向けたパイロット活動も開始、現在、新たな中学校COGES設立へ向け動いています。

5月の新規立ち上げから、もうすぐ1年。「住民参加を通じた質の改善」というまさに未踏の地へ踏み出したみんなの学校ですが、その道のりは陰しく、まだまだ道半ば。山あり谷ありの連続です。そんな中でも、妥協せず、目標を見失うことなく、確実かつ具体的な成果を生み出すため一步一步コミュニティと共に進んでいきます。



『寺子屋EPT』—。近所に住む1年生から5年生の子どもが通ってきています。

**ニジェール「みんなの学校プロジェクト」ホームページ
“毎月更新しています！”**

<http://www.jica.go.jp/project/niger/0608872/index.html>

「マンスリーレポート」みんなの学校の活動をリアルタイムで知ることが出来ます。また「みんなの学校だより」および「みんなでみんなの学校だより」のバックナンバーはホームページからダウンロードできます。是非、ご覧ください。



Stories という店が、小田急線北沢駅の新宿寄り線路際にある。カウンターだけの6~7人入れば、いっぱいになってしまう小さな店だ。ブルースのレコードがいつもかかっていた。カウンターの奥にコクトーのアンファンテリーブル（手に負えないガキ）のポスターが貼ってあったのを覚えている。もうずいぶん行っていないから、まだ店があるかどうかわからない。この前、ふとその店のことを思い出して、改めて店の名前の由来を知らないなと思った。マスターにいつか聞こうと思って、聞きそびれた。彼は本や音楽が好きだから、誰かの小説か歌の題名からとったのだろうか。

Stories は Story の複数形だ。だから店名の意味は単にいくつかの物語ということなのだろう。しかし、私はこの単語の響きに、みんながよく知っている様々な物語という意味よりは、自分自身や近親者にとってのみ重要な普通の人のそれぞれの人生の話というニュアンスを感じる。もちろん、これは自分だけの想像にすぎない。

さらにより個人的な印象を付け加えると、この言葉の響きが、自分が関わったり、見たり、聞いたりした様々なプロジェクトの話という感じがしてしまう。海外の技術プロジェクトと聞くと、一般に人は、日本の日常とは、違った世界のように思うらしい。しかし、実際のプロジェクトは社会の縮図のような普通の出来事が毎日起こっている。そこには、様々な組織や人間の関係があり、プロジェクトとしてあるいは個人としての成功や失敗があり、葛藤や、友情や、争いまである。そして必ず終わりがある。そんなさまが、普通の人の人生に重なるかもしれない。最中にいるとき、近くで見ているときは、なまなましいが、終わってしまうと、ただの物語になってしまう。そして物語になってしまうと、渦中ではわからなかった悪かったところも、やればよかったこともよくわかる。しかし、わかってもう遅い。

イボさんという人がみんなの学校プロジェクトで働いていた。一昨年亡くなってしまったが、亡くなる前

編集後記

Stories

原 雅裕

一年間くらいは、私と一緒に、旧 COGES 推進室を廃し、COGES の新しい担当部署を作る支援に奔走していた。今から思えば、その頃はすでに病に侵されていて体力的にも精神的にも相当きつかったろうと思う。しかし、彼は外部からの働きかけで、教育省内に新しい部署を作る支援をするというこの非常に難しい仕事に執着し、ありとあらゆる手を打ち、最後にはニジェールの有力な祈祷師に祈ってもらっていた。私は祈ってもらっても仕方がないのでは、と言ったら、彼は物事にはタイミングがある、出来ることはなんでもやる、と答えた。今、その部署が整備された形で新設され、人事が刷新されたことで物事が動き始め、プロジェクトとの関係もよくなり、COGES 政策にも様々な違った可能性が見えてきた。この部署が新設されるまでは考えられなかったことだ。祈祷が効いたかどうかはともかく、イボさんは正しかった。彼のおかげで、プロジェクトと COGES は再び息を吹き返した。しかし彼自身は部署の新設を待たず、亡くなってしまった。

イボさんの人生はもう物語になったが、彼の数えきれないプロジェクトやニジェールの教育開発への業績や貢献は燦然と輝いて残っている。そしてその功績や業績以上に、彼と直接的、間接的に働いたり接したりした人が彼から受け取った友情や学びは大きかった。彼に学んだ人たちが、ニジェールやアフリカや世界に散らばって別の物語を作り始めている。

生きていれば、病気になったり、事故にあったり、さまざまな困難にぶつかる。幸運な出会いや別離もある。努力だけではどうにもならないこともある。プロジェクトも同じようなものだ。ただ人生とプロジェクトの物語の違いは、その長さで、プロジェクトの寿命は3~5年、長くて10年で、一般的な人の寿命より短い。だから、時間を惜しみ、どんな立場でも投げやりにならず、どんなに状況が悪くてもあきらめず、忍耐を持ってベストを尽くし、成果ににじり寄るという気持ちがとても大事だ。それをイボさんが教えてくれた。彼は亡くなる直前まで、プロジェクトの新しい活動の話をも自分が参加する前提で話していたそうだ。

私は、イボさんが病気の時に無力だったし、イボさんのような人間にもなれない。それでも、イボさんの残したものを生かし、その発展を支援することなら少しはできるかもしれない。ありがとうイボさん。合掌